

# 「大學の理念」の史的展開

## 緒論

大學は、各國においてその形態がかなり異なるとはいえ、中等教育ミッテラビクと一定の仕方シキで聯關する高等教育の機關として、すでに短からぬ發展的な傳統を負うて、現代に與えられている。近く發足する新制大學といえどもアメリカを通じてヨーロッパの傳統と發展的に連つてゐる。

しかし眞實なる「大學の理念」*Idea of university*, *Idee der Universität* は、こんにち確定的な所與の事實であるよりも、むしろ恐らく全世界の大學が探求しつゝありまた探求せねばならぬ一つの困難な課題である。様々の事由による大學理念の混迷と喪失、そして模索的探求こそは、廿世紀大學の特殊なる精神的狀況であつて、批判的反省を失わざる限り各國の學徒らは、大學の運命と使命とに深く思を致し、色々の角度から新なる大學の理念を探求している。ことに大學史上の轉換期に立つ我國において、それは大學に負わされた嚴肅な使命である。そして

森 昭

この探求は言葉の眞實な意味での哲學的探求たるべきことを、現實そのものが我々にきびしく迫つてゐる。哲學は批判を不可缺の方法とする。現代こそ「一切がそのもとに投ぜられるべき批判の時代」(カント)たるであらう。我々は過失的所與としての大學を後から理念づけるのではなくて、否定的理性を以つて、それを全てあくまで批判せらるべき假説的事實としつゝ、未來に眞實の大學理念を積極的主體的に探求しなければならぬ。ソクラテスの死に集中せる祖國の頽廢危機に絶望して、シチリアに哲人政治の實現を企劃し、師の運命にも似て自らも政治に蹉跌せしめられて、教育に使命的に決斷し、哲人國家のイデアによるアテナイの再建を熱願しつゝ、「アカデメイア」を創建したプラトンのイデアリズムこそ、大學理念の探求のうちに反復的によみがえる主體的生命たるべきであらう。

現代にまで傳統された事實としての大學は、中世に發

生し、沈滞と高揚、形式的持續と創造的衝動の時期をくり返しつつ、近世の幾世紀かを通じて發展の轉換をとげて來た。時あつて大學は内から自主的にその使命を果し、或はながく外からの運命に受動的に屈從した。「新しいもの創造的なものは多くのばあい、初め大學の外に發生し、最初は大學から拒否せられるが、やがてしかし大學に同化せられ、ついにそれが大學を支配するようになる」と云うヤスベルスの批判的所説は正しいであらう。

(Jaspers; Die Idee der Universität, s. 6.) 所謂「諸々の大學には聲望高き書籍上の博識が發生し持續し支配し、月並みでない仕事は、それが一般に認められるまでは、これを大學はしばしのあいだ退けるのである。大學というものは何かを野生的に成長さすことを好まない庭園のようなものであり、」(ヤコブ・グリム)、大學もねたみ深くまた慎重にすぎるミネルヴァのふくろうであつたかも知れない。かくて大學の外の識者は大學の運命に見切りをつけ、大學の内での使命を思う學徒は大學の運命と使命との乖離に苦惱する。現存の大學を粉碎し望み通りに造り直し得たとしても「どのような施設を我々はうち立てようとするのであろうか」というフレンクスマナーの所論は正しいがしかし安易ではなからうか。

(A. Flexner; Universities, American, English, German, 1930, p. 6)

大學は發生いらい、轉換的發展の過程において、時代と社會との世界現實によつて云わば下から基體的に限定され、その世界觀によつて上から理念的に規定せられつつ、そのつどの形態を持続的・變革的に實現して來た。ここに言う世界現實とは、各時期の民族・經濟、狹義の社會・政治、社會的勢力となつた限りの宗教やその他の文化諸體系などを、その構造契機とする所謂歴史的社會的現實である。また世界觀とは、かかる世界現實に制約されつつしかもそれを超えて人間が自覺した世界の究極原理的理念である。この意味の世界觀における世界とは、右の如き世界現實(狹義の世界)と絶対原理(廣義の神)と人間の全體的普遍的究極的な統一である云つてよい。従つて世界現實と世界觀(或は世界自覺)とは分ちがたく聯關するのであるが、しかもあくまで基體的と主體的との兩方向に分極する。かかる意味の世界現實と世界觀とによつて規定されつつ大學の形態は轉換的に持續し、ある時期において世界現實によつて殆んど一方的受動的に制約されたとき大學は沈滞し、ある瞬間においてこの被制約を自主的に世界自覺の媒介たらしめるこ

とを得たとき大學は使命に高揚した。

現代の大學が、世界現實（殊に産業社會・民主主義・専門科學）から殆んど一方的に規定せられて、外見上は未曾有の隆盛を呈しながら、しかし世界觀的には理念を喪失して深い沈滞にあえいでいることは、すでに多くの論者の指摘する所である。（十九世紀にはイギリスのニエウマン、第一次大戦後十年間のドイツにおける數十の大學論、特にヤスペルス・シュプランガー・シェーラー等、アメリカでは三十年代以後の大學論、フレクスナー等々。）外見上の隆盛は現代の世界現實の活潑な變動を反映し、沈滞の真相は深く近代の危機に連るのではなからうか。轉換期的現代の二重の相貌が現代大學の奇妙なる二面性（隆盛と沈滞）となつてゐる。これを一面として統一すべき新しい大學の理念は、ただ現代世界（世界現實）の究極原理的自覺（世界觀）としてのみ實現せられるのである。然し世界觀が原理的に分裂してもはや統一的な世界觀が存在しない現代において、悉くは恐らく預言者の哲學によつてのみ解決されることも知れない。しかも「全ての新しいもの動くもの創造的なものは、個々人の孤獨のなから、即ち組織への組入れに反對ししげば周囲からも排斥せられる人々の實存のなから、出

てくる」(Jaspers: op. cit. s. 40)とすれば、組織團體

としての大學は自ら解決し得ざる課題を自らに課す「不幸なる意識」の運命を負うのかも知れない。むしろ大學は何を知り能うか、何を爲すべきか、何を望み得るか、そして大學とは何であるかというカント的設問こそ大學的理性にふさわしく又それに負わされた自己批判の課題であろう。かかる自己批判のみが大學が自らその「理念」を自覺し得る唯一の道<sup>メソッド</sup>ではなからうか。そして大學的理性の自己批判は、カントにおける自然科学だけでなく、ドイツタイにおける精神科學のみでもなく、上述のような他の諸契機からなる世界現實を、大學自らがその發展的建設に参加しつつ前提し、もし「望み得る」ならば世界觀的「理念」の自覺において、「大學とは何であるか」を實踐的に實現することを旨とすべきでもあらうか。その場合にも外部からの超越批判は止まないであろう。しかし右の四つの設問において自己を批判する大學的理性は、あくまで「全體的交渉意志」(Kantor: Kommunikationstheorie (Jaspers: Existenzphilosophie, s. 49))を以て「同情のない批判」にも進んで身をさらして自己批判の媒介とし、「新しいもの動くもの創造的なもの」、「月並みでないもの」を拒否してきた悪しき傳統から自

己を解放するのである。しかしだからとて自主性を捨てて、「民衆的氣まぐれの一々の變化に應答する風見」となるのではない。「社會が要求するものでなく、必要とするもの」(Flexner; op. cit. p. 5)を批判的に眞理探求の立場から社會に與えようとする意志によつて、大學は社會的連帶の義務を果すであろう。「大學はその領域の内部に何らの權威をも知らず、凡ゆる權威をなげ捨て、無限なる形成活動のうちにひそむ眞理のみを尊敬する。」(Jaspers; Die Idee usw. S. 49)すでになげ捨てられた神(教會)の權威と國家の權威とに代る民衆的偶像の權威にも理性的大學は盲從しなすであろう。主體的な「理念のうち」に生きる自由「Freiheit des Lebens in der Idee (op. cit. S. 51)こそ大學の生命だからである。しかもこれは我々にとつて果さるべき課題であり、その理念が「何であるか」を明確な形態として提示する力を私が持たないことは云うまでもない。しかしこの自由は我々が「望み得る」ものであることを私は信じたい。

このような「望み」をいだきつつ、「理念のうち」に生きる自由へと自我の現存を否定的理性的に解放せんがため第一着手として、その媒介となるべき大學の發展的傳統を、歐米大學の過去について追跡することが、本論

の意圖であり、いきおい私が將來に期する大學論の歴史的部門に限定され、しかもその單なる素描たるに止まる。

(註) ここに云う大學とは現今では一定の中等教育機關(日本の舊制では高等専門學校、新制では高等學校、アメリカでは主に high school, ドイツでは主に Gymnasium, イギリスでは主に public school, フランスでは主に lycée と college)と直結する高等の最終教育機關を總稱する。従つて日本では大學令による大學、アメリカでは四年制 college, そつて更に professional schools を持つもの(これが一般に university と云われるが名稱は一定せず)、或は後者だけのもの、ドイツでは Universität と Hochschule, イギリスでは university と university college, フランスでは université とこれと同程度もの、を指す。但し國民教育組織が確立される以前には、大學と中等教育との聯關は不定であり、この時期には一般の通念に従う大學を取扱うことにする。

## 一、中世の大學

### 一 中世大學の世界觀的意義

私は大學理念探求のイデアリズム的精神をプラトンのアカデメイアに想起しつつ、しかし今は大學の傳統的形態の發生を一般の所説に従つて中世の末期に求める。

ローマ世界帝國の没落の後、ローマ法王を通して神に由來するものとして實現された普遍的(カトリック)世界秩序が、神の

世界と地上の世界との全面にわたつて建設せられ、キリスト教世界帝國が實現された時期（九世紀—十世紀）に、中世の最も中世的な形態は實現された。教會的職階制度や封建的身分組織等の世界現實を基盤とし、世界觀的には神を中心とする世界と人間との普遍的一元的支配が、中世的中世を特色づける。この中世の中世的自覺において非存在とされた世界的・人間的なるものが、十字軍・東方貿易・民族國家の發展によつて自己を對自化し初めた中世末期から、近世への移行轉換の運動が初まる。その現れである都市の發生やギルドの形成等の新なる現象の一環として、即ち「十一、十二世紀の交ヨーロッパを大波のよう

に風靡した association のあの本能の自らなる所産」(Mashall; Medieval Universities, I, p. 15) としつゝ、

しかも他面では學問研究の當時の特殊な條件に制約されつつ (Vgl. Dilthey; Ges. Schr. VIII, s. 118-120) 文化財の口頭的傳達を求め

る學徒らによつて、サレルノ、ボローニア、パリ等の諸都市において、共同的な研究と教授との「團體」universitas が形成された。大學はその語

源の事實的起源をここに持つ。(ボローニアは「學生の團體」u. scholarium、パリは「教師の團體」u. magistrorum) として確定し難いある時期に成立し相並んで中世諸

大學の二大典型となる。)——一般に中世大學は「神學的大學」Theologische Universität の典型とされるが (Vgl. Adolf Rein; Die Idee der politischen Universität, 1932) しかし少くもその發生の當初においては、法王廳 (世界觀的には神に對應) と帝國 (世界現實に對應) との中世的權威によつて設立されたのでなく、却て人間たる教師ないし學生の、或は教師と學生との、自發的結合として、下から形成されたのである。當時の他の下級教育機關たる、「寺院學校」が神の信仰を中心として「都市學校」が世界現實の必要から起つたとすれば、「大學」はむしろ人間的結合から發生し、從つて中世的世界觀の、人間的契機を代表するのであつて、嚴密な一面的な意味の神學的大學ではなかつた。(宗教改革期の大學こそ最も神學的である。) さればこそ、本質的には神よりも人間世界に連る醫學 (サレルノ) とローマ法學 (ボローニア) との復興に伴つて最初の大學は發生したのであり、また中世世界觀の完成たるスコラ哲學 (パリ) と云えども、神を中心としつつも、古代の人間世界的なアリストテレスの哲學を原理とするものであつて、又かかる學問として大學において研究教授されたのである。逆に云えば中世の大學はうちに近世への胎動を藏じつつ中世世界觀の形成に參

加し、中世世界の自覺的完成たると共にそれを否定する有力な現實勢力でもあつた。近世への時代轉換の様々な原因のうちには大學の發生と發展とが算えられる所以である。——神學と並んで醫學・法學が上級の三學部であつたこと、下級學部たる文科が古代的な七自由科を主要教科としたこと、そしてラシニダルが云うように法學部が大多數の大學の指導的學部であつたこと等もまた、中世大學が單に神學的でなく、デュルケムが云うように「半社會的・半世俗的」(Durkheim; L'évolution pédagogique en France, 1938, Chap. VIII) であつたことを物語る。

## 二一 ウニヴェルシスタと

### ストウディウム・ゲネラーレ

大學の起源たるウニヴェルシスタは言葉としては一般に人間のギルド的ゲノツセンシャフト的(ディルタイ)集合體を意味し、近世大學が理想とする *universitas facultatum, u. litterarum* の如き學部や學科の普遍的全體的研究教授の機關を意味するのではないのであつて、それ故これを現代の大學の内實上の起源と考へべきでなく、ましてそれを直ちに大學理念の原型とするのは行過ぎである。むしろ大學の内實上の起源は *studium generale* であ

ある。これすらもゲネラーレという言葉からともすれば誤解されるように、近世大學の理念の基本條件たる普遍性 *universality* とか全體性 *totality* とかを意味するのではなく、(イ)凡ゆる所からの學生を收容する學校、(ロ)神學法學醫學の少くも一つが教授される高等な教育の機關、(ハ)これらの學科を二人以上の教師が教える學校について、初めは慣習や慣行によつて與えられた名稱であつた。しかしやがて十三世紀頃から中世的權威(法王と皇帝)が右の條件を具えた特定の學校にストウディウム・ゲネラーレという名稱を認許し、同時にこれらの大學で學んだ者に對して「何處にても教える權利」*ius ubique docendi* という特權を下附するようになった。かくてストウディウム・ゲネラーレは右の(イ)の條件によつて(1)その構成員がヨーロッパ世界の凡ゆる地方からの人間たることと並んで、(2)そこで學んだ教養がヨーロッパ全世界に特權的に妥當することとなり、この兩面から中世大學は、當時唯一の世界と考へられたヨーロッパ世界という意味の、世界的普遍性と實現した。かくて、この特性は法制的規定にすぎなかつたにも拘らずそれ以上に、(1)による、地理的な意味での外延的普遍性 (*ubiquity*) と共に、更に(2)によつて文化的な意味での世界的普遍性 (*ubiquity*)

city, universality) を實現せるものであつたことに、我々は注目すべきである。

かかる特質を持つストゥディウム・ゲネラーレとウニヴェルシタスとは初め法制上結びついたものではなかつたが、中世末にはストゥディウム・ゲネラーレは右の特質の外、ウニヴェルシタスのな學徒の團體を附屬せしめる學校を示す言葉となり、兩者は同義語となり、やがてウニヴェルシタスを語源とする university がストゥディウム・ゲネラーレの特質を内容上受けついで、時代の發展と共に十八世紀末頃からユニヴァーサリテイの意味を哲學的世界觀的により具體化し深化して、凡ゆる學部において全ての學問が研究教授される最高教育機關としての哲學的世界觀的な理念的統一を自覺的に實現する「哲學的大學」philosophische Universitätへと、發展的に轉化した。私はかかる轉化的發展の萌芽を中世大學に見ようとするものである。

中世大學は、かようにそのストゥディウム・ゲネラーレの面において世界的普遍性を持つていたが、「學生と教師とのウニヴェルシタス」universitas studii たる面において、學生と教師との人間の人格的な結合ないし交渉の場所という特質を持つてゐる。制度上これは「コレギ

ウム」の制度として發展し、現代フランスの學制やイギリスの大學の college system の源流である。これはまた、非人格化された現代大學を人格的教育機關として再建せんとする多くの大學論者がたえず理想として回顧するものであるが、中世大學的ヴェルシタスをそのまま現代の世界現實に再現しようとするのはシェーラーの云う通り時代錯誤たるを免がれないであらう。(Max Scheler: Die Wissensformen und die Gesellschaft; 1926, Universität und Volkshochschule, S. 492-508) だがヤスペルスのようにこれを主體的に改竄して大學理念の哲學的世界觀的探求の媒介とする時、ウニヴェルシタスは現代の意味を發揮し得るであらう。「大學はその名によればウニヴェルシタスである。認識活動は、單にただ専門的な仕事のなかでのみ成長することは云え、なおあくまで一つの全體としてのみ成立つものである。一つの全體との關係においてのみ學問的な生氣が生ずる。……ウニヴェルシタス即ち哲學的全體性の理念のなかには、學問のもつ精神的なるものがひそんでゐる。……單なる社交性の形式においてでなく、學問的なるものと精神的なるものとの領域において、理念は學問的人格的生活の内部での交渉 Kommunikation を強く要求する。」

(Jaspers; *Die Idee der Universitäts*, 1923, S. 46-7)。  
 かようにヤスベルスが、十九世紀初頭ドイツの哲學的大學の理念を主體的に繼承發表しつつ中世大學のウニヴェルタスを「哲學的全體性」と改釋しているのに對し、ニエウマンは中世的傳統により多く傾きつつ同時にヤスベルスの改釋への方向を示している。即ち大學は「universal learning の學校」であつて、「あらゆる所から」from all parts 學徒が「一つの點に」in one spot に、「あらゆる種類の知識を求めて」參集し「廣く意味の mutual education」をなす場所たることにこそ「大學の理念」は實現されると彼は説いた。(J. H. Cardinal Ne man; *Historical Sketches*, Vol. III. Chap. II. What is a University?)

### 三 中世大學の歴史的役割

「大學のうちには國民の魂が反映する」(ホルローデン)と云われるように、中世でも各國の大學(十四世紀までにイタリアには十八、フランスには九、イギリスには二、スペインとポルトガルには八、ドイツには五、その他北歐に三の大學)は、夫々の「分化」(diversité)を示したことを勿論だが、しかも理念的にも教育の内容や方法に於ても更には制度的にも、世界的普遍的な「統一」(unité)

を實現しており、(Dankheim; *op. cit.* p. 200)「しかも大學の内部組織は中世ヨーロッパ世界を映し出す小宇宙の觀を呈した。

理念的統一性についてはすでに述べた。更にまた全てとは云えぬが一般に上級學部が神醫法の三學部からなり文科が下級學部であつたことと並んで、ウニヴェルシタスが四つの「國民」(nationes)の團體から構成された點でも、中世諸大學は共通な統一性を持つていた。また大學の身分構成は、武士團體の待童・從士・騎士の三段階、手工業ギルドにおける徒弟・職人・親方の三階程を反映し、scholus-baccalarius-magister の三分に分れ、入學や學位授與の方式も全てに共通である。教授の方法もひとしく「講義」と「討論」(更に「反復」)を主とし、その仕方も殆んど共通であり、共通にラテン語が使用され、「教科書」も各學科で大體一定していた。——このことは蓋し當然であつた。「十一世紀から十三世紀にかけて、ヨーロッパのキリスト教諸國は、あたかも宗教上の一帝國のような觀を呈してゐる。全ての國々の聖職者はラテン語を話す。教會は單一の信仰を教える。十字軍はキリスト教徒たる諸王の共同の企てである。武士の團體は國際軍隊で



ある。……(國籍のいかんを問はず) 有名な教師達は、凡ゆる國々から學生を引きつけ、しかもその教えは生徒たちによつて理解される。それは教師がラテン語で教えるからである。……或る一國で諸制度(大學や自由市)が成功するや、それは忽ちヨーロッパ中で模倣される。(モロー『英國史』上卷、二二—三頁) ポロニア、特にパリが一般に各國の大學から模倣せられた。

かかる統一性にもかかわらず、中世末期における民族國家の自立の動向によつて、各國の大學が果した世界現實的(リ社會的)、世界觀的(思想的)役割は各國におもひなり分化してゐる。しかも中世的世界觀の完成に歸與しつつ、中世的世界を崩壞に導く勢力の一つであつた點で、各國の大學は共通性を持つてゐる。——パリ大學の學徒團體は「イギリスのステュアート諸王の治下においてロンドンの市政機關が得たと同じ政治的意義を獲得した。」(Rashdall, I. p. 54) 大シスマの危機に際しては「全ヨーロッパの主權者の役割」を果した。まことにイタリアの法王權、ドイツの皇帝權に對して、フランスでこれに當るものこそパリ大學であり、スコラ哲學の中心學府(アペラール、トマス)としてパリ大學はキリ

スト教世界の全體を灌漑する世界的な「知識の流」の源泉であつた。しかも中世末における實念論的な正統スコラ哲學に對立する名目論の消長、ルネッサンスに通ずる古典主義の擡頭、民族國家的自覺の先驅たるガリア主義の優勢等により、パリ大學は近世の到來を告げる曙の鐘であつた。——いわゆるスララ的教育形式によつて阻害されることの比較的少い法學、を以つて聞えたポロニア大學は、「法律家身分の創造」によつて「恣意と答とに對する理性と教育との勝利」を示し、專制政治を中正化する「文明化の原動力」となり、ローマ法のヨーロッパ社會への「滲透と模倣」をによつて法律的政治的制度的改變に貢獻し、(Rashdall, III. p. 57) ．またローマ法研究によりイタリアの國民意識を喚起してルネッサンスをさきがけた。——島國として獨自な發展をつづげたイギリスではオックスフォード大學でロジャール・ベーコンが出て既に十三世紀に名目論的經驗論を説き、オッカムがこれを繼承して反スコラの近世思想を先驅し、ウイクリフが宗教改革の先蹤となつた。

まことにデュルケムの云ふ通り中世大學の影響は政治家が想像するよりもはるかに大きかつた。しかし又その影響が全く大學それ自身の内部から出て來たのでなか

つたことも勿論である。大學がかくも大きな影響を持ち得たのは、中世末期の世界現實の基體的動向に根ざしつつ、しかもそれをそこに根ざす中世的世界觀の自覺的形態の媒介に轉ずるにふさわしい「學徒的組織の素材」おして尊敬すべき稔多<sup>ヘンリク・ドゥルクハイム</sup> (Dürkheim; op. cit. p. 206) を實現したからである。即ち中世的世界現實の世界的普遍性に支えられつつ、キリスト教的ヨーロッパ世界の全域から、教師と學生とを、殆んど相互に同質的な各國の諸都市に集め、そして若干の分化はあれ殆んど同一の仕事において學徒らを結合<sup>アソシエーション</sup>せしめ、また同一の規則に従わしめることによつて、彼らの生活と思想との全面にわたつて、現實的・世界觀的な世界的普遍性に參ぜしめたのであつた。即ち中世大學は、世界現實的普遍性に根ざしつつこれを世界觀的普遍性に轉化媒介する組織を創造し理念を自覺した。その根柢にはすでに近世をはらんだ中世的世界現實の歴史的發展があり、これに根ざす人間の所業として大學の組織と理念とは實現されたのであるが、中世人の世界觀的自覺においてはあくまでそれは神の名による人間の営みであつた。かくの如き世界現實と人間と神とを、神を中心としつつ包む一つの「世界」が、人間の作爲を超える全體的實體としてなほ存在していた。

中世大學の「稔多さ」はまさにかかる全體的實體からのおのづからな發りであつた。かように「全體的實體が疑いもなく現在していた」から、中世大學の「教育は、確實な形式に結びついて、自明な内容をもつ」ことが出来たのである。(Vgl. Jaspers; Die geistige Situation der Zeit, S. 90) 逆に云えばかかる全體的實體が疑わしくなりそして崩壊せる世界においては、統一的な世界的普遍性を大學はもはやおのづから實現することが出来ない。敢えて實現せんとすればエスイタ派の強壓、多少とも政治化している今日のカトリシズムの反動、をさけることが出来ない。そしてまた神に代つて、或は單一民族を或は單一階級を全體世界たらしめて、統一的な世界現實的・世界觀的な普遍性を實現せんとする意欲が、反動的と進歩的との相異はあれ、幾らかの人々の心をとらえる。その時大學は神に代る新しい權威の前に立たしめられる。だが「大學はその領域の内部に何らの權威をも知らず、凡ゆる權威をなげ捨て、無限なる形成活動のうちひそむ眞理のみを尊敬する。」そして大學は「何ものをも顧みることなき認識せんとする意志」[ricksschlosses Erläuterungswollen (Jaspers; Die Idee, S. 40)] をもつて眞理を認識しようとする。眞理のみが大學の權威なき權威で

ある。

ともあれ中世の大學は、自ら實現した組織と理念とが、世界そのものの近世への行轉換によつて、その眞理性を失つたにもかかわらず、世界との「全體的交渉」から自己を遮斷し、近世的世界の進歩から立ちおくれ疎外されて、その後數世紀の間十八世紀末頃にいたるまで、惡評高きスコラの形式主義の形骸のなかに自己を封鎖しつゝ、深き沈滞をつづけた。しかもその間世界現實の反進歩的勢力（新舊兩教の宗派や絶對國家）によつて受動的・一方的に規定せられて「支配の道具」*instrumenta dominionis* となり、新なる世界觀形成への自主的主體性を大學は殆んど全く喪失したのである。（未完）